

遺影と死者の人格

葬儀写真集における肖像写真の扱いを通して

Portraits of the Deceased and Their Personalities :
The Treatment of Portrait Photos in Funeral Photo Albums

山田慎也

YAMADA Shin'ya

- ① 葬儀と遺影
- ② 追悼としての葬列絵巻
- ③ 絵巻から写真集へ
- ④ 撮影時がなくなる遺影
- ⑤ 生前の姿から死者の人格表象へ
- ⑥ 葬儀記録と葬儀用遺影の作成

【論文要旨】

死者儀礼においては、人の存在様態の変化により、その身体状況と取扱い方に大きな変化がおきてくる。身体を超えて死者が表象される一方、身体性を帯びた物質が儀礼などの場でたびたび登場するなど、身体と人格の関係を考える上でも死はさまざまな課題を抱えている。

葬儀では身体性を帯びた遺骨だけでなく、遺影もまた重要な表象として、現在ではなくてはならないものとなっている。なかでもいわゆる無宗教葬においては、遺影のみの儀礼も多く、そこでは最も重要な死者表象となって亡き人を偲び、死者を礼拝するための存在となっている。ところで遺影として使用された写真は、生前のある時点の一断面でありながら、一方で死者の存在そのものを想起させるものである。しかしこうしたまなざしは、写真が人々の間で使用されるようになった当初からあったのであろうか。本稿では追悼のための葬儀記録として作られた葬儀写真集の肖像写真の取り扱いの変化を通して、遺影に対するまなざしの変化を検討した。

ここでは写真集が作られ始めた明治期から、巻頭に故人の肖像が用いられるが、撮影時に関するキャプションが入れられている。しかし明治末期から大正期になると次第に撮影時に関する情報がキャプションに入らなくなり、さらに黒棒等を利用して葬儀写真との連続性が見られなくなっていく。つまり当初、撮影時のキャプションを入れることで、生から死への過程を表現するものとして、肖像は位置付けられていた。これはプロセスを意識する葬列絵巻とも相通じるものであった。しかし後になると、撮影時に関する情報を入れないことで時間性を取り除いたかたちで使用され、肖像は死者を総体的に表象するものとして位置付けられるようになったのである。こうして写真が生の一断面でありながら死者として見なす視線が次第に醸成されていったことがわかる。

【キーワード】 遺影, 死, 葬儀, 身体, 写真